

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

日本医史学会は 90 年にわたる長い歴史を持つ学会である。当初は医学の歴史を研究し先哲を顕彰する医師たちの集会として出発し、多くの先人の努力によって医史学が切り開かれ、現在では医史学に関心を寄せる幅広い分野の人たちが集う学会となっている。医史学が研究の対象とする歴史の分野も、医療関係者が学ぶ現代医学のみに限らず、日本の伝統医療である漢方医学、医学の実践としての医療、さらにその社会・文化との関わりなどにも広がっている。

21 世紀に入って医学とその実践としての医療は、社会の中でますます重みを増している。医学・医療の発展によって、医療に対する社会の期待と信頼がますます大きくなっている。さらに社会の情報化および国際化が進む中で地球規模の広がりを持つようになってきている。その新しい時代の中で、日本医史学会に数多くの人たちが集い、さまざまな視点から医学・医療の歴史の中に史実を探究している。

過去 5 年間における学術的に重要な活動としては、

1) 学術大会

- ・第 118 回日本医史学会総会・学術大会 (2017/6)、武田時昌会長、京都大学芝蘭会館 (京都)
- ・第 119 回日本医史学会総会・学術大会 (2018/6)、園田真也会長、鹿児島県医師会館 (鹿児島)
- ・第 120 回日本医史学会総会・学術大会 (2019/5)、山内一信会長、ウイックあいち (愛知)
- ・第 121 回日本医史学会総会・学術大会 (2020/12)、弦間昭彦会長、オンライン開催 (東京)
- ・第 122 回日本医史学会総会・学術大会 (2021/9)、長野仁会長、オンライン開催 (島根)

2) 学術雑誌

- ・日本医史学雑誌第 63 巻 (2017)、第 1~4 号 (第 2 号は総会抄録号)
- ・日本医史学雑誌第 64 巻 (2018)、第 1~4 号 (第 2 号は総会抄録号)
- ・日本医史学雑誌第 65 巻 (2019)、第 1~4 号 (第 2 号は総会抄録号)
- ・日本医史学雑誌第 66 巻 (2020)、第 1~4 号 (第 2 号は総会抄録号)
- ・日本医史学雑誌第 67 巻 (2021)、第 1~4 号 (第 2 号は総会抄録号)

3) 月例会

- ・2017 年 : 1、3、4、5、10、11 月、神奈川地方会と合同 : 9 月、6 史学会合同 : 12 月
- ・2018 年 : 1、3、4、5、10、11、神奈川地方会と合同 : 10 月、6 史学会合同 : 12 月
- ・2019 年 : 1、3、6、10、11 月、神奈川地方会と合同 : 9 月、6 史学会合同 : 12 月
- ・2020 年 : 1、10、11 月、神奈川地方会と合同 : 9 月
- ・2021 年 : 1、3、4、5、6、10、11 月、神奈川地方会と合同 : 9 月

4) 日本医史学会編『医学史事典』

日本医史学会所属の研究者を中心に執筆を行い、丸善出版から『医学史事典』を 2022 年に刊行予定である。

b. 当該領域における国際的な役割

医史学 history of medicine は医学・医療の歴史を研究対象とする。現代の医学・医療 medicine

は西洋医学から生み出された近代医学で、人体と病気について探究する科学としての側面と、患者の病気を癒やす実践としての側面がある。この世界共通の近代医学の他に、それぞれの文化圏には固有の伝統医学があり、現在でも代替医療として一定の役割を担っている。

日本における医史学の役割は、一つには世界共通の近代医学の歴史を解き明かすことであり、もう一つには日本の伝統である漢方医学の歴史を研究することである。さらに近年では、医学・医療と社会との関係も医史学研究の視野に入ってきている。

近年、医師・医療者出身の医史学研究者が世界的に急速に減少しており、医史学研究の活力が著しく低下している。日本医史学会には医師・医療者出身者が数多く在籍しており、その研究は世界の医史学の発展に大きく貢献するものである。

さらに我が国固有の漢方医学は、代替医療としても国際的に認められつつあるが、その歴史研究は我国の医史学者による研究が大きくリードしている。

またアジア各国の医史学会との連携も深めており、台湾医学史学会、韓国医史学会との間で研究者の交流を行っている。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

日本医史学会会員は、学会の大会での研究発表や雑誌での論文として研究成果を発表するが、それ以外に、それぞれ著作を通して広く医史学の成果を社会に伝えている。その中の優れたものについて、日本医史学会では矢数医史学賞で表彰している。最近5年間では以下のものが受賞となっている。

- ・第32回(令和2年): 西迫大祐『感染症と法の社会史—病がつくる社会—』新曜社
- ・第31回(令和元年): 表 宮川浩也『日本医家伝記事典 宇津木昆台『日本医譜』』日本内経医学会
- ・第30回(平成30年): Wolfgang Michel-Zaitz『Traditionelle Medizin in Japan』München: Kiener Verlag
- ・第29回(平成29年): 代表執筆者 町 泉寿郎『曲直瀬道三と近世日本医療社会』武田科学振興財団杏雨書屋、鳥井裕美子『前野良沢—生涯一日のごとく—』思文閣出版

d. 学会運営上留意している点

日本医史学会は、その会員が医師・医療系に限らず、漢方医学系、歴史・社会系も多数含まれており、学際的 interdisciplinary な研究が行われている。その分、会員の価値観が多様であり、その多様性を尊重するような運営を心がけている。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

他の分科会との連携はとくに行ってない。

日本医学会に連携する活動はいくつか行っている。

- ・日本医学会公開シンポジウム「適切な遺伝学用語のあり方」(2018年12月11日)において、日本医史学会理事長、坂井建雄が「用語のあり方について—医学系学会の立場から—」で講演をした。
- ・日本医学会創立120年記念事業(2022年4月)では、『日本医学会創立120周年記念誌』の編纂を日本医史学会理事長の坂井建雄が編集委員長として協力している。